

【個人研究】

英雄の心理学 —生成する自我を象徴する英雄—

高尾 浩幸*

The psychology of a hero : A hero symbolizes the creating ego

Hiroyuki TAKAO

This study deals with the psychology of groups and individuals, related hero myths, and the symbol of the ego. An individual in a group is subject to psychological influences such as diminished autonomy, intellect, and emotional control. Le Bon posited that those influences were due to suggestion, Tardo posited that they were due to imitation, and Sherif posited that they were due to sympathy. In contrast, Freud thought that an individual projected his ego ideal onto the leader of a group and the two identified each other as members of the group. Because of Freud, a hero myth involves the mechanism of the ego ideal and identification as a member of a group. The oldest hero myth in Babylonia relates the typical deeds of the hero Marduk. When Laglan compared numerous hero stories, he identified 22 common characteristics. The current author closely examines the symbolism of heroes studied by S. Freud, O. Rank, C.G. Jung, J. Campbell, and M.L. von Franz. The current author contends that a hero symbolizes a model of the creating ego in accordance with the Self.

Keywords : hero, myth, symbol, ego, group psychology

英雄、神話、象徴、自我、集団心理

1 避けることのできない集団

人間の日常生活の多くは、集団との関わり、集団の中で過ごされる。家族との関わり、あるいは学校、会社の中で活動、つまり集団生活が人間の基本的な生き方である。人間は独りでは生きることができない。

集団には、規模、存続する期間、組織的な内部構造、指導者の役割などによってさまざまな様態が考えられる。小規模だが長年継続する家族関係、契約や規則に基づく会社組織、一時的なイベントに集まる人々など、多種多様な集団が存在する。

それぞれの集団には固有の性質があるが、各集団の特質を超えて「集団そのもの」はある共通した影響を個人に及ぼす。

心理相談室や精神科クリニックを訪れるクライアントから、「人間関係が苦手」「人からどう見られているのか気になる」「人から意見されたことが頭から離れず眠れない」といった訴えがしばしば聞かれる。言うまでもなく集団は個人を保護し生活しやすくする利便性を提供する一方、ときには大きなストレスの原因となり個人を苦しめる。

人間の生活、人生とは切っても切れない関係にある集団、個人によって形成されている集団、しかし場合によっては個人を圧迫するほど強い影響

* たかお ひろゆき 文教大学人間科学部臨床心理学科

力をもつ集団は、私たちにとって避けることのできない大きなテーマである。では、このような集団はいったいどのような心理的作用を個人に及ぼすのか、その作用機序は何なのか、そして集団との関わりによって個人心理に何が起こってくるのか、こうした点について本論では心理的な解明を行っていく。集団から個人が受ける受動的な影響のみならず、集団のうちにある個人にどのような積極的心理が動きだしてくるのかを明らかにすることによって、集団生活の新しい側面や対処法の発見につながることを期待できる。

2 集団と個人の心理学

本章では、これまでの代表的な集団心理の研究を概括してみたい。まず集団の心理的研究としてはル・ボンによる『群衆の心理』が有名である。⁽¹⁾彼はフランス革命の際の群衆を観察し、群衆の行動が非合理で感情に支配されることに気づいた。群衆の中にいる個人は、判断力の低下、自主性の喪失、反社会的行動に陥るといふ。ル・ボンはその理由として、集団の中で個人は催眠状態に陥り、群衆を支配する「集合心」に感染し、暗示にかかるからであると説明した。⁽²⁾

フランスの社会学者ガブリエル・タルドは、『模倣の法則』において「模倣は社会活動の基礎」であると述べ、群衆行動も主に模倣によって生じると考えた。⁽³⁾

ジンメルは、流行の発生について、周囲の人々への同調性を求める欲求とそれらの他者との差異化や個別化を求める、相反する欲求を同時に持ちあわせているとする両価説を唱えた。⁽⁴⁾

また集団場面においては同調圧力が発生し、アメリカのシュリフによる集団的同調傾向の実験によれば、集団での実験体験から個人の中に集団規範が形成されるという。⁽⁵⁾

こうした研究によれば、集団が個人に及ぼす影響の心理メカニズムとして、ル・ボンは暗示、伝染、タルドは模倣、シュリフは同調をあげている。これらのメカニズムは、世間、社会といった外的世界と接触をもつ個人心理の一番外側の領域、つまり分析心理学でいうところのペルソナ領域で働

いている。⁽⁶⁾しかし、ペルソナ領域での心理活動だけでなく、人間のここにはもっと奥行きがあり、より深いところから動いてくることを誰もが経験するであろう。

このころの内部構造の観点から集団と個人の関係を考察したのがフロイトである。次の章ではフロイトの集団心理学理論を見ていく。

3 フロイトの集団心理学

(1) 集団心理の現象

フロイトは「集団心理学と自我の分析」(1921)において、ル・ボンが観察した集団の中での個人心理の変化を次のようにまとめている。⁽⁷⁾

集団の中に認められる豊かな情緒的結合は、集団のもつ性格の一つ、すなわち個人の自立性と主体性の欠如、個人の反応と他人のそれとの同一性、個人のいわゆる集団的個人への低下、といった特色に十分な説明を与えてくれる。しかし集団は全体としてみると、もっと多くのことを示している。知的作業力の弱化や、情緒の無制御、節度を守ったり猶予したりする能力の喪失、感情表現が限界を越える傾向、感情表現を行動の形で完全に放出してしまう傾向、ルボンが印象ぶかく叙述したこれら一連のことは、精神活動の初期の段階への退行をはっきりした形で示している。

フロイトがル・ボンの記述をまとめているように、個人が集団の中に入ると、自立性と主体性の低下、類似した反応、知的な低下、情緒制御の低下、感情が行動化しやすい、などの特徴を示す心理的变化がもたらされる。このような集団の特性が生じてくる機序をル・ボンは「暗示」によって、タルドは「模倣」によって説明しているが、集団の影響による個人心理の深刻な変化を十分には解明できていない。そこでフロイトは一歩進め精神分析の「リビドー概念」を応用した。

(2) 集団心理の理論

フロイトは、高度に組織化され持続性のある、教会と軍隊という二つの人為的な集団を取りあげ分析を試みている。

まずフロイトによれば、人間の基本的性質として、元来人間同士は互いに憎悪の心構え、攻撃性を示すという。ところが集団の中ではこの攻撃性は抑制され、個人はみな同じようであるかのように行動し、他人の性情に堪え、少しの反発感情も感じない。⁽⁸⁾ さらには、集団のメンバー間に仲間意識や連帯感が生じてくることもある。

集団内におけるこの変化についてフロイトは、「社会的感情は最初は敵意をふくんでいた感情が、同一視の性質をもった一つの積極的な調子をおびた結合に転化」したためであると述べ、集団内での同一視が個人の感情に変化をもたらすとしている。⁽⁹⁾

こうした考察を踏まえて、フロイトは「この二つの人為的集団では、個人は一方で指導者（キリスト、司令官）に、他方で集団の中の他の個人にリビドー的に結びつけられている」と分析した。⁽¹⁰⁾

フロイトによれば、個人は指導者を過大評価し、完全な者と理想化する。指導者は個人が到達できない「自我理想の代役」となって愛されるのである。⁽¹¹⁾

他方、集団内のお互いの自我は同一視しあう。同一視（同一化）とは、「ある主体が他の主体の外観、特性、属性をわがものにし、その手本に従って、全体的にあるいは部分的に変容する心理的過程」のことである。⁽¹²⁾

ここまでのフロイトの議論をまとめると、集団は「同一の対象を自我理想とし、その結果お互いの自我で同一視し合う個人の集まり」と定義される。⁽¹³⁾ この集団の構造は組織集団に限定されず、原始的集団でも情緒の昂揚と思考の制止の法則は共通する。⁽¹⁴⁾ さらに、フロイトは集団の定義を次のように言い換えている。⁽¹⁵⁾

すべての個人は相互に平等であらねばならないが、しかし彼らすべてが一人の者によって支配されることを欲する。たがいに同一視

する多くの同等の者と、彼らすべてに優越する一人と、これが生きる力のある集団で実現される状況である。

このフロイトの記述は、家族内状況、特に父親の権力が強い父権の家族における、父親と子どもたち兄弟姉妹の集団を想起させる。実のところ、集団の記述から家族を想起するのは、実際の思考の流れとは反対であろう。フロイトが集団心理にリビドー理論を適用した時点で、彼の発想は家族内での心理状況（エディプス状況）に基盤をおいていたに違いない。こうした推論を裏付けるように、どうして集団と個人がこのような心理メカニズムをもつように至ったのかについて、フロイトはさらに一歩考察を深め、人類史上早期の原始群族で起こった「父親殺し」にその理由を求めている。

(3) フロイトの父親殺し

フロイトは「トーテムとタブー」(1913)において、ダーウィンの原始群仮説から「女をみな独占して成長した息子たちを追っばらってしまう、暴力的で嫉妬ぶかい父親」に注目する。息子たちは暴力的な父親を恐れる一方、女たちを自由にする点で羨望していた。「ある日のこと、追放された兄弟たちが力をあわせ、父親を殺してその肉を食べてしまい、こうして父群にピリオドをうつにいたった。」革命的な「父親殺し」である。⁽¹⁶⁾

フロイトによれば、父親殺しという犯罪行為の結果として社会組織、道徳的制約、宗教などが始まったという。そして社会組織の基礎となる集団組織について、「この組織は、彼らが追放されていたときに生じたと思われる同性愛的感情と行為にもとづくものだったのだ。」と述べている。⁽¹⁷⁾

ここでの同性愛的感情は、後のさまざまな人間集団のメンバー間に生じてくる仲間意識、連帯感の感情的基盤となる。また殺害された父親へのアンビバレントな感情は身近な動物に転移されて「トーテム動物」となり、やがて神へと高められていった。神を祀る仲間意識をもつメンバーによる集団とは、フロイトが集団心理の分析に取りあげたカトリック教会に他ならない。さらに現代の

人間集団と原始群族との関連について、フロイトは次のように語り、両者は本質的に同じであると述べている。⁽¹⁸⁾

したがって集団とは、原始群族の再生のようなものである。あらゆる個人の中に原始人が潜在していて、任意に群れをなして集まると、原始団体がそこに再現されるのである。

(4) 英雄神話の発見

トーテム動物の創出と並行して、原始群族に大変に興味深い前進、つまり英雄神話の発見が起こった。⁽¹⁹⁾

…けれども、新しい家族は古い家族の影にすぎないし、父親たちは大勢だし、それぞれ他の父親の権利によって制限されていた。

当時は、集団から解放されて、父親の役割にとって代わりたいという、憧憬にみちた不満が個人を動かしていたかもしれない。最初にこれをした者は叙事詩を書いた詩人であり彼の空想の中で、ある前進が起こった。詩人はその憧憬という形で現実をいつわり、英雄神話を発見した。英雄とは、父親を打ち殺したただ一人の人物であるが、神話ではなおトーテム的な怪物とみなされていた。父親が少年の最初の理想であったのとおなじようにいまや詩人は、父親に代わろうとする英雄のうちに最初の自我理想を創造したのである。

つまり、集団心理から解放されたいという個人の願望が英雄神話を生み出したというのである。現にフロイトは、「神話は個人が集団心理からぬけ出す第一歩である。最初の神話はたしかに心理学的な神話、つまり英雄神話であった。」とはっきり述べている。⁽²⁰⁾

(5) 父親殺しから英雄神話へ

実のところ、フロイトが現代の集団心理、集団と個人に働く心理メカニズムの起源として想定した、原始群族での父親殺しが歴史上のどこかであったとする根拠を見つけだすことはできない。

ところが、詩人が空想の中で発見したとする英雄神話は人類に数多く残されている。もし実際に記録された英雄神話がフロイトの父親殺しストーリーと類似するものならば、フロイトの考えたように、集団と個人の心理が英雄神話に象徴的に表現されているとみなすことが可能となってくる。

そこで、集団から抜けだそうとする個人の心理について、さらに解明を進めるため、第4章で人類最古の英雄神話エヌマ・エリシュ、第5章ではラグランの英雄研究をとりあげ、続く第6章において英雄神話の心理的機能、心理メカニズムを考察していく。

4 エヌマ・エリシュ

本章では、世界最古の英雄物語と考えられるマルドゥク神話を取り上げる。この神話は、現在のイラク北部地方に栄えたバビロニア第一王朝（紀元前1894年頃～紀元前1595年頃）の図書館跡から発掘された7枚の粘土板に記されている。⁽²¹⁾ その後の西欧を初めとする世界各地の英雄神話に大きな影響を与えたと考えられているマルドゥク神話のあらすじは次のようになる。⁽²²⁾

『エヌマ・エリシュ』と呼ばれるバビロニアの天地創造神話によれば、世界がまだ混沌としていた頃、真水を表わす男神アプスーと海水を表わす女神ティアマトが存在していた。アプスーとティアマトが交わり、そこから神々がうまれた。天神アヌ、その息子が知恵の神エア、その子がマルドゥクである。

子孫の若い神々たちは走ったり叫んだり笑ったり、と騒々しいため、ついに年とった父神であるアプスーは我慢ができなくなり、若い神々を滅ぼす計画をたてた。しかし知恵の神エアはいち早くこれをかぎつけ、アプスーを捕らえて殺した。

それからエアは美しいダムキナを花嫁とし、マルドゥクが生まれた。マルドゥクはたちまちのうちに成長し、強大な雄姿、四つの目、四つの大きな耳、火を吐く口、光輝く衣など、他の神々と比べて二倍もの能力を持つ

ていた。

片や息子の神々は母神ティアマトに父神アプスーの仇討ちを持ちかけ、戦闘計画が練られた。ティアマトは蛇龍、そして龍、怪獣、巨獅子など世にも恐ろしい怪物軍団を造り出し、とりわけ物凄いキングーという神を自らの第二配偶者として全軍の指揮官に任じた。

エアはティアマト軍を迎え撃つが敗退し、代わったアヌも歯がたたない。そこで父祖アンシャルは神々を呼び集め、マルドゥクに応戦を依頼する。マルドゥクは戦いに勝ったら神々の最高位に立つことを認めてくれるようにとの条件を出して引き受けた。

神々がマルドゥクにその力を示してみせるよう求めると、マルドゥクは、天空に十二宮の星座を現したり消したりして超能力を示した。無事にテストに合格し王杖と王衣を得たマルドゥクは、手に三叉の鉾、弓矢、網をもち、つむじ風の戦車に乗って戦いに出かけた。

怒り狂ったティアマトはマルドゥクに一騎討ちを挑む。ティアマトはマルドゥクを丸呑みにせんものと、大口を開けて襲い掛かる。マルドゥクはティアマトの大口に突風を送り込み、矢を放ち、ティアマトの心臓を突き破る…。こうして、マルドゥクはティアマトを仕留めた。

マルドゥクはティアマトの身体を干し魚のように二つに割って、一つを天に上げて天蓋とし、もう一つを地に置いて地下水が溢れ出ないように覆う大地とした。

マルドゥクは一年を十二か月として、それぞれに名前を付け、それぞれに星座を設定した。またティアマト軍の指揮官キングーが引き出されて殺され、その血から人間がつくりだされた。神々に奉仕させるためであった。

神々たちは粘土を捏ねて煉瓦を造り、マルドゥクのためにその宮居エサギラを二年がかりで造りあげた。大いなる神々が一堂に会する戦勝大宴会の席上では、音楽が奏でられ、ビールが振る舞われる。マルドゥクを讃えて五十の様々な称号が披露される。五十番目は「バル・マタティ（全国土の主）」である。

(1) 神話の背景舞台

イラク北部一帯は、四大文明の一つ、チグリス・ユーフラテス文明の興った地域である。ペルシャ湾に流れ込むチグリス、ユーフラテス両河の水量は、多すぎれば氾濫を起こし、少なすぎれば干ばつを招く。穀物収穫に直結する「水のコントロール」は、有史以前から人々の最重要課題の一つであったであろう。バビロニアの天地創造神話が、混沌としていた世界に、大河の真水を表わす男神アプスーと海の水を表わす女神ティアマトから始まるのはもっともなことである。

19世紀中頃に古都ニネベ遺跡の発掘調査により出土した7枚の粘土板文章にはその天地創造神話が記され、慣例により詩の最初の語句をとって『エヌマ・エリシュ』と名づけられた。「上の方で…時に」の意であり、物語は天から始まる。⁽²³⁾

(2) 父神による子孫滅亡計画

父神アプスーと母神ティアマトから次々に生まれた若い神々が騒々しいため、父神は「昼もおちつけず、夜もねむれない。やっつけてやりたい。」と我慢できず、若い神々を滅ぼす計画をたてる。⁽²⁴⁾ 神話は父子葛藤を描くが、その理由は睡眠と覚醒、静と動、安定と活動、平安と革新の対立である。

しかし、子孫の知恵の神エアはいち早く滅亡計画をかぎつけ、アプスーを捕らえて殺した。父子葛藤は、息子による「父親殺し」へと発展する。

(3) フロイトの父親殺し説との比較

フロイトの嫉妬深い父親、静けさと睡眠を求める父神アプスーは、求めるものに違いはあるけれども、息子たち・子どもたちを追放し、殺そうとする態度は同じである。息子と父親は、葛藤を感じ、それを力づくで、戦いで解消しようとしている。

しかし、子孫滅亡計画は失敗した。父神アプスーが殺されたことから、彼の仇討ちのために息子たちの集団が形成される。そして仇討ちという明確な目的を持った強固な集団が組織されると、「集団と個人」のテーマが浮かび上がってくる。物語は、母神ティアマトを頭目とするこの集団と英雄

神マルドゥクとの対決へと進んでいく。

心理的に見ならば、個人の自立性と主体性が欠如し、個人の反応と他人のそれとが同一であるような集団的個人⁽²⁵⁾から、英雄に自我を同一化させる個別的個人がテーマとなってくる。

フロイト自身はバビロニア天地創造神話を分析しているわけではない。にもかかわらず、およそ3500年前の神話が父と息子たちの戦い、息子たちの集団から英雄マルドゥクへとストーリーを展開させていることと相似をなすように、フロイトは父親・息子たちの葛藤、集団にうもれる個人の自我が英雄に同一化する過程を取り上げている。

人類最古のバビロニア英雄神話がフロイトの父親殺し説と大変に類似した物語構造をもっていることから、フロイトが想定したように、英雄神話は集団と個人の心理を象徴的に表わすとみなすことができる。つまり、人類最古の英雄神話は、父親と子ども（息子）の葛藤が自我形成に結びつくことを示唆しているのである。

なお象徴的観点からマルドゥク神話を心理的に詳しく解釈することによって、自我の発達についてのより豊かな知見を得ることが期待されるが、この点については稿を改めて論じてみたい。

5 ラグランの英雄研究

前章で紹介したマルドゥク神話以降、世界の各地で英雄物語が発明・発見され、語り継がれてきた。英国のラグラン卿は、伝説、神話、演劇における英雄を数多く取りあげ分析した古典的著作『英雄』(1936)を上梓した。彼は、英雄物語によく見られる特徴的パターンを22個あげている。⁽²⁶⁾

- ① 英雄の母親は、王家の未婚娘である。
- ② 父親は王であり、しかも
- ③ しばしば英雄の母親の同族者である。がしかし
- ④ 英雄が妊娠された状況は普通ではなく、
- ⑤ 彼は神の息子とも言われている。
- ⑥ 英雄の誕生に際して、通常は父親または母方の祖父が彼を殺そうと試みる。しかし
- ⑦ 彼はさらわれ、

- ⑧ 遠くの国で代理の両親によって育てられる。
- ⑨ 英雄の子ども時代については何も知らされない。が
- ⑩ 成人になるや、彼は将来の彼の国に戻る、あるいは出向く。
- ⑪ 王、かつあるいは、巨人、竜、野獣を倒したあと、
- ⑫ 王女、しばしば前任者の王の娘、と結婚し、そして
- ⑬ 王となる。
- ⑭ しばらくの間、彼は無難に統治し、
- ⑮ 一連の法律を公布するが、
- ⑯ やがて神々、かつあるいは、臣民の人気を失い、
- ⑰ 王座と町から追い出され、その後
- ⑱ 神秘的な死を迎える。
- ⑲ その場所はしばしば丘の上である。
- ⑳ 英雄の子どもたちは、もしいたとしても、彼のあとを継ぐことはない。
- ㉑ 彼の体は埋葬されない。にもかかわらず
- ㉒ 彼には一つあるいは複数の聖なる墓がある。

これらの特徴をすべての英雄が満たすわけではない。ラグランがこれらのパターンを英雄たちと比較したところ、エディプスは22個の満点、テセウスは20個、ロムルスは18個、ヘラクレスは17個、ペルセウスは18個、イアソンは15個、ディオニュソスは19個、アポロは11個、ゼウスは15個、モーセは20個、そしてアーサー王は19個が当てはまった。

前章の英雄マルドゥクを見てみると、①、②、⑤、⑥、⑨、⑩、⑪、⑬、⑭、⑮の少なくとも10個が該当する。マルドゥク神話を記録した粘土板には欠損部が多いため、原文では当てはまる箇所が増える可能性がある。また⑯以降の英雄の没落についてまったく記載がないのは、マルドゥク神話が人類最古の英雄神話としてその後の英雄物語の部分的原型を提示したためと考えられる。前半の15個に限れば、マルドゥクは三分の二の10個の特徴を備えている。

実際のところ、英雄物語と聞いて思い浮かべやすいのは①から⑮までの、誕生から戦いまでのス

トリーではないだろうか。⑩以降の没落過程は英雄物語に含まれはするものの、別の相、もう一つの側面を表していると考えられる。

英雄を史実上の個人ととらえることはできず、むしろ英雄物語を人の人生行路の比喩として考えてみると、ユングの個性化過程が思い浮かんでくる。ユングは人生を前半と後半に分け、前半を成長し社会に適応するべく課題に取り組む上昇的過程と位置づけ、後半を成熟し自分自身になっていく個性化過程の時期と指摘している。⁽²⁷⁾ よく知られた英雄物語やこうした連想から、英雄は人生前半の若者イメージに結びつきやすいものの、それとは別の、見方によっては没落していく側面のあることを忘れないようにしたい。

ラグランの英雄研究との比較によって、最古の英雄マルドックは、その後の英雄たちと多くの点で共通する特徴をもつことが明らかとなった。ラグランの取りあげた英雄は、ギリシャ神話、旧約聖書、ジャワ人の英雄、上ナイルのシルク族の文化英雄、ケルト神話、ロビンフッドの物語、とさまざまな地域、時代の、戦う英雄、預言者、文化英雄など広い範囲に及ぶ。そして現代においても英雄物語は人々の最も好むストーリーのひとつと言える。地球規模に拡がり時代を超えて生産・発見される英雄には、人間を魅了してやまない何かがあるに違いない。次章では、人々の興味関心を引きつける英雄と人間心理との関連を分析していく。

6 英雄と自我

(1) フロイトの「自我理想」

第3章で述べたように、フロイトは「父親が少年の最初の理想であったのとおなじようにいまや詩人は、父親に代わろうとする英雄のうちに最初の自我理想を創造したのである。」と、自我理想を表したものとして英雄が創造されたとしている。⁽²⁸⁾

ここでの「自我理想」は、社会的場面では理想化され愛される指導者（父）に投影されるが、同時に個人の心理においては「自己観察、道徳的良心、夢の検閲、抑圧のさいの主要な影響力」とし

て働き、後の「超自我」と類似の機能を示す自我の一部である。⁽²⁹⁾ 実際のところフロイトは「自我とエス」において、「父への憧憬にたいする代償形成としての自我理想は、あらゆる宗教がそこから生成した萌芽をふくんでいる。自我と自我理想とを比較して、おのれの不肖の身を批判することは、憧憬を抱く信者がよりどころにする謙讓な宗教感情をうむ。」と、自我を批判する自我理想（超自我）の働きを記述している。⁽³⁰⁾

(2) ランクの「英雄に対応する自我」

フロイトの「集団心理学と自我の分析」(1921)に先立って、フロイトと緊密な関係にあったotto・ランクは『英雄誕生の神話』(1909)を著わし、英雄神話の心理的解釈を試みている。ラグランの『英雄』に30年近く先んじて、ランクはエディプス、モーセなど18人の英雄物語を紹介し、そこから「平均的伝説」を抽出している。⁽³¹⁾ ラグランの22個の特徴と比較すると、最初の13個に相当する部分、つまり英雄が父親を倒し次世代の王となるところまで、をランクは分析対象のストーリーとして選んでいる。

ランクは「きまって英雄と父親・母親とのあいだの正常な関係が阻害されている」⁽³²⁾ ことに着目し、英雄物語と家族内葛藤の関連を次のように語っている。⁽³³⁾⁽³⁴⁾

家族小説の傾向と英雄神話の傾向とが一致するところから、子どもの自我と伝説の英雄とは対応するものだとみなしてさしつかえあるまい。神話においては、一貫して両親から離れようとする努力があらわに出ているということ、また、子どもという個体の抱く空想のなかでは子どもが独立・自立を手に入れようと努める時期に、両親から離れたいという願望が目覚めるということ、以上を思い出してみよう。この場合、子どもの自我は、伝説の英雄とそっくりの振舞いをする。

こうして神話作者たちは英雄に自分自身の幼い頃の話をつけ加えることによって、自分と英雄とを一体化する。彼らはいわば、私も

このような英雄であったのだ、と言っているのである。こういうわけで、物語に出てくる英雄とはもともと、その英雄という人物のなかで自己に再会している自我だということになる。自我は、自分がなした最初の英雄行為によって、すなわち父親に対する反抗によって、自分自身が一個の英雄であった昔に帰って回想しているのである。…こうして庶民的な自我は、一般大衆から抜きん出た国民的英雄の強大非凡な自我のなかに、自分自身の幼兇的な願望や憧憬が実現されているのを見る。

ランクは、「子どもの自我と伝説の英雄とは対応する」と述べ、父親に対して反抗する子どもの自我が、英雄イメージに結実するとしている。興味深いことに、ランクもフロイトも神話創作者の心理を想定し、英雄イメージ創出の心理的起源を提起している。

(3) ユングの「たましいを形成する、リビドー象徴」

これに対して、ユングは一時期フロイトと近い関係にあったが、1912年に『リビドーの変容と象徴』(後に『変容の象徴』と改題)を出版したことから、フロイトと離れ独自の道をたどり、やがて自分の活動を「分析心理学」と呼ぶようになった。この転換点となった著作の中で、彼は英雄を「たましいをつかみ取る、ないしは形成する諸理念、諸形態、諸力を象徴する疑似人間存在である。」と定義している。⁽³⁵⁾ ユングは、英雄が人間の「たましいをつかみ取る、ないしは形成する」影響力、機能に注目している。たましいをとりこにし、形作る英雄イメージは、人間の自我形成に大きな影響を及ぼす。

またユングは、「すべてのリビドー象徴の中で最も素晴らしい象徴は、人間の形をとった、魔物か英雄である。」と述べる。⁽³⁶⁾ フロイトと方向性を異にしたユングは、リビドーを性的衝動に限定せず、より広い心的エネルギーの意味で使っている。ユングによれば、「リビドー」という言葉で表わされる心理的状況を適切に表現するサンスク

リット語の「テヤス (Tejas)」には次の意味が結び合わされている。⁽³⁷⁾

- ① 鋭さ、切り裂く刃
- ② 火、輝き、光、熱烈、熱
- ③ 健康的な外観、美
- ④ (胆汁に位置づけられる) 人間の器官のもつ
火色あるいは色を生産する能力
- ⑤ 強さ、エネルギー、生命的な力
- ⑥ 情熱
- ⑦ 霊的あるいは呪術的パワー：影響、身分、威厳
- ⑧ 精液

つまり、ここには「主観的強烈さ」が示されている。⁽³⁸⁾ 英雄が最も素晴らしいリビドー象徴である、とユングが語る時、これらの力強いイメージが付随している。それゆえ、これらのイメージが英雄の外観、気質、持ち物(武器)、言動、描写にしばしば登場するのはもっともなことと言える。

(4) キャンベルの「つねに生成を続ける者」

神話学者のジョゼフ・キャンベルは、『千の顔をもつ英雄』(1949)において古今東西の英雄神話、伝説、説話を驚くべきほどの広がりをもって通覧し、ユングの分析心理学の立場を援用しながら人間の魂(プシケ)の運動を一定のモデルに定式化している。彼の著書名が示すように、英雄にはさまざまな顔があり、一つの狭い定義に押し込めることはできないが、それは英雄に次の特徴があるからである。⁽³⁹⁾⁽⁴⁰⁾

英雄とは生成中のものの庇護者であって生成し終わったものの庇護者でないのは、かれがつねに現在のうちに存在しているからである。「アブラハムが存在する以前に、わたしは存在している」〔『ヨハネによる聖福音書』八・五八〕。英雄は永遠なる存在と時間におけるうわべの無変化とをけっしてとりちがえたりはせず、またつぎなる瞬間(ないしは「別なるもの」)を、その変化〔の要素〕によっ

て永遠を損うものとして恐れたりはしない。

英雄とは、生きとし生けるものにあってはほとんど無意識化されている超意識の要求を生きながらにして認識し、表現する者の謂にほかならない。英雄の冒険はその人生において啓示を得た当の瞬間、すなわち生きながらにして現世での死という暗黒の壁を超えて光明に通じる道を見出し切り拓く決定的瞬間を表現している。

英雄は「生成中のものの庇護者」、「つねに現在のうちに存在し」、「無意識化されている超意識の要求を生きながらにして認識し、表現する者」である。キャンベルのいう「超意識」は、ユングの「自己」に近いものと理解できる。すると、英雄とは、自己の要求を認識し、表現することで、つねに現在のうちに生成を続ける者、といえる。ユングは英雄のもつリビドーの性質から「主観的強烈さ」を明らかにしたが、キャンベルは「つねに現在のうちに生成する」特徴を強調し、英雄の冒険指向性、ダイナミックな性質に光をあてている。

(5) フォン・フランツの「自己に従う自我のモデル」

ユングから大きな影響を受けたフォン・フランツは、グリム童話や神話を題材として分析心理学的解釈を数多く行った。彼女は『おとぎ話の心理学』(1970)において、英雄物語が口承伝承として伝えられる実際的な効果と必要性から、英雄を自我と自己(Self)との関連において次のように定義している。⁽⁴¹⁾

だから英雄は、健康で意識的な状況を回復する者です。彼は、部族や国民のすべての自我が、その本能的、基本的な全体性のパターンからずれている状況を、健康で正常に機能するように回復させる一つの自我なのです。だから、英雄とは〈自己〉に従って機能する自我のモデルを提供する元型的な像である、ということが出来ます。それは無意識の心によって作られた、注目されるべきモデルなの

です。そして、正しく機能する自我、〈自己〉の要求に適って動いている自我を呈示します。英雄が、ある程度〈自己〉であるようにみえるのはそのためです。なぜなら彼は〈自己〉の道具として働き、〈自己〉が生ぜしめようとするものを完全に表わしているからです。だから一面、彼は〈自己〉でもあります。〈自己〉の治癒的な傾向を表現しかつ体現しているからです。そういうことで、英雄はこの奇妙な二重性格をもっています。…たとえば、飢えに直面しているあるエスキモーの部族のことを考えてみましょう。となかい狩りはよくありませんでした。未開人は極めて簡単に諦めるので、身体的心理的にそうなる前に失望から死ぬのです。そこに話し手が現われて、幽霊と接触しそれによって飢えた部族を救った男などについて語ります。それが人々を再び立ち直らせるのです。まったく情緒的に、ですが。自我は、英雄的で勇敢な、かつ希望に満ちた態度をとり入れます。それが集合的状況を救うのです。それが、困難な生活条件の中で、英雄物語の不可欠な理由です。英雄神話を再現することで生きのびることができるのです。それは生きがいのようなものであり、人々は当然それによって励まされるのです。

現実に必要な場面において英雄物語が語られると、「(聞き手の)自我は、英雄的で勇敢な、かつ希望に満ちた態度をとり入れ」、困難な状況を生きのびることができる。ここでの英雄は「行動のモデル」として機能している。「英雄とは〈自己〉に従って機能する自我のモデルを提供する元型的な像である」というフォン・フランツの定義は、英雄物語が実際に心理的な効果をあげる実例に基づいており説得力がある。

前に述べたキャンベルは、英雄を「無意識化されている超意識の要求を生きながらにして認識し、表現する者」としたが、フォン・フランツは、英雄を〈自己〉の要求を実現しようとする自我のモデルとみなし、より明確に心的構造における自我と自己の結びつきを定式化している。

さらにフォン・フランツは、集団が集合的状況、困難に直面したとき、英雄物語が語られると状況が変化することを取りあげている。このような集団における英雄の働きは、英雄神話が集団と個人の心理に深く関わりとしたフロイトの想定を裏付けるものとして注目に値する。

(6) 英雄に象徴される心理

ここまで、英雄に象徴される心理、とりわけ自我や自己との結びつき方を見てきた。英雄は自我を象徴する、と大まかに言うことはできるが、より厳密にはフォン・フランツの「英雄とは〈自己〉に従って機能する自我のモデルを提供する元型的な像である」とする定義が納得できる。

ここでの英雄が表わすものについて、フォン・フランツは「自己に従って機能する自我のモデル」、フロイトは「自我理想」、オットー・ランクは「父親に対して反抗する子どもの自我」、ユングは「たましいをつかみ取る、ないしは形成する諸理念、諸形態、諸力を象徴」「リビドーの象徴」、キャンベルは「つねに現在のうちに生成を続ける」と述べている。これら諸家の見解から、英雄は自我一般の象徴というより、「自己に従って現在のうちに生成を続ける自我のモデルとしての象徴」とまとめることができる。

7 英雄の心理学

前章まで考察してきた集団と英雄の心理学をまとめてみたい。

- (1) 人間は独りでは生きることができず、家族、学校、社会と常に集団（共同体）の中で、集団と関わりながら生活している。
- (2) 集団に入ると個人は、自立性と主体性の低下、類似した反応、知的な低下、情緒制御の低下、感情が行動化しやすい、などの深刻な心理的影響を受ける。
- (3) その影響の機序について、ル・ボン「暗示」を、タルドは「模倣」を指摘した。これに対してフロイトはこころの内部構造を想定し、「指導者を自我理想とし、メンバー同士が互いに同

一化する」心理メカニズムを打ち出した。

- (4) 自我理想と同一化の心理機制は原始群族での父親殺しに起因するとフロイトは考えたが、その根拠を見つけることはできない。ところが原始群族のある詩人が創出したであろうとフロイトが想定した父親殺しのテーマをもつ英雄神話は、数多く今日に伝えられている。人類最古の英雄神話、バビロニアのマルドゥク神話はその一つである。フロイトによれば、英雄神話は集団と個人の心理に深く関わる。
- (5) ラグランは多数の英雄物語を比較し、22個の共通する特徴を見つけ出し、ヴァリエーションを含め典型的な英雄物語の拡がり呈示した。
- (6) 英雄に表わされる心理について、フロイト、ランク、ユング、キャンベル、フォン・フランツの諸見解から、英雄は自我一般の象徴というより、「自己に従って現在のうちに生成を続ける自我のモデルとしての象徴」とまとめることができる。
- (7) 象徴としての英雄には、次の二つの働きがある。一つめは、集団から個人を解放し、同時に集団（共同体）を刷新する。二つめは、無意識から自我を成長させ、生命を更新させる。生きた象徴がしばしばそうであるように、英雄象徴は集団という外の世界と生命という内なる世界に、個人を通して、同時に働きかける。

8 文献

- 1) ギュスターヴ・ル・ボン『群衆心理』(1895)、櫻井成夫訳、講談社、1993
- 2) 我妻洋『社会心理学入門（下）』、講談社、1987、149頁
- 3) ガブリエル・タルド『模倣の法則』(1890)、池田祥英、村澤真保呂訳、河出書房新社、2016
- 4) 中島純一「ル・ボン、タルド、ジンメルにみる流行理論の系譜——集合行動論の観点から——」、『東海大学紀要・文学部』73: 69-84、2000
- 5) ケイン聡一、小池真由、中島健一郎「同調行動研究のこれまでとこれから——動機に着

- 目する必要性——』、『広島大学心理学研究』20: 121-132、2021
- 6) C.G. Jung (1921), *Psychological Types*. The Collected Works of C.G. Jung, Vol. 6, Princeton University Press, 1971, para. 370. 及び、高尾浩幸「ペルソナ心理学と日本的意識」、『文教大学人間科学研究』39: 75-81、2018
- 7) S.フロイト「集団心理学と自我の分析」(1921)、井村恒郎、小此木啓吾、他訳、『フロイト著作集第六巻』、人文書院、1970、231頁
- 8) 同上、220頁
- 9) 同上、235頁
- 10) 同上、215頁
- 11) 同上、228頁
- 12) J.ラブランシュ、J.-B.ボンタリス『精神分析用語辞典』、村上仁監訳、みすず書房、1977、344頁
- 13) 前掲、「集団心理学と自我の分析」、231頁
- 14) 同上、209頁
- 15) 同上、235頁
- 16) S.フロイト「トーテムとタブー」(1913)、『フロイト著作集第三巻』、高橋義孝他訳、人文書院、1996、265頁
- 17) 同上、267頁
- 18) 同上、236頁
- 19) 前掲、「集団心理学と自我の分析」、246頁
- 20) 同上、247頁
- 21) 三笠宮崇仁監修、岡田明子、小林登志子著『古代メソポタミアの神々——世界最古の「王と神の饗宴」』、集英社、2000、123頁
- 22) マルドック神話は、基本的に矢島(1991)を要約し、必要な箇所については後藤等(1978)を参照しつつ筆者が編集した。表記の一部を変更してある。矢島文夫「オリエントの神話伝承」、『世界の神話伝承・総解説』、自由国民社、1991、104-105頁。後藤光一郎、矢島文夫、杉勇訳「アッカド」、『筑摩世界文学大系1 古代オリエント集』、筑摩書房、1978、103-271頁、特に105-133頁
- 23) 前掲、『古代メソポタミアの神々』、122頁
- 24) 前掲、『筑摩世界文学大系1 古代オリエント集』、109頁
- 25) 前掲、「集団心理学と自我の分析」、231頁
- 26) Load Laglan, *The hero: a study in tradition, myth, and drama* (1936). Dover Publications, Mineola, 2003, pp. 174-175
- 27) ユングは1921年に初めて「個性化」を、「一般に、個性存在を形成し特殊化してゆく過程を意味し、特殊的には、一般的なものから区別されたものとしての、集合心理から区別されたものとしての心理学的個人の発展」と定義している。C・G・ユング『心理学的類型Ⅱ』(1921)、高橋義孝、森川俊夫、佐藤正樹訳、人文書院、1987、196頁
- さらに、ユングは1931年に著わした「人生の段階」において革新的な人生の発達モデルを呈示している。C.G. Jung, *The stages of life* (1931). In: *The Structure and Dynamics of the Psyche*. The Collected Works of C.G. Jung, Vol. 8, 2nd edition. Princeton University Press, 1969, para. 749-795
- 28) 前掲、「集団心理学と自我の分析」、246頁
- 29) 同上、226頁
- 30) S.フロイト「自我とエス」(1923)、井村恒郎、小此木啓吾、他訳、『フロイト著作集第六巻』、人文書院、1970、283頁
- 31) オットー・ランク『英雄誕生の神話』(1909)、野田倬訳、人文書院、1986
- 32) 同上、103頁
- 33) 同上、112頁
- 34) 同上、176-178頁
- 35) C.G. Jung, *Symbols of Transformation* (1912). The Collected Works of C.G. Jung, Vol. 5, 2nd edition, Princeton University Press, 1967, para. 259. 引用箇所の翻訳は、アンドリュウ・サミュエルズ、バーニー・ショーター、フレッド・プラウト『ユング心理学辞典』、山中康裕、濱野清志、垂谷茂弘訳、創元社、1993、21頁による。
- 36) 同上、para. 251
- 37) 同上、para. 237
- 38) 同上、para. 238

- 39) ジョゼフ・キャンベル『千の顔をもつ英雄(下)』
(1949)、平田武靖、春日恒男、他訳、人文書
院、1984、63頁
- 40) 同上、80頁
- 41) M-L・フォン・フランツ『おとぎ話の心理学』
(1970)、氏原寛訳、創元社、1979、78-79頁